様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１日現在

機関番号：13601
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520135
研究課題名（和文）　バーサ戯曲の文献学的、ならびにパフォーマンス的研究
～バーサを訳して上演する～
研究課題名（英文）　A Philological and Performing Study on Bhasa’s Dramas
～Let’s translate a Bhasa’s play and stage it～
研究代表者
船津　和幸（FUNATSU KAZUYUKI）
信州大学・人文学部・教授
研究者番号：40219085

研究成果の概要（和文）：バーサ作のサンスクリット戯曲の特徴を翻訳研究として考察するなかで、バーサ戯曲の独創性と魅力はその短編性とナラティヴの相対化にあると理解される。それは見る側、演じる側の想像力に訴え、解釈の大いなる自由をゆだねる。そして、実際に、『打ち砕かれた腿』を脚本化するプロセスでその醍醐味を体験的に確認できた。最終的には、演出家シャンカル・ヴェーンカテーシュワランとの共同作業により、実験的なヴォイス・パフォーマンス『百と一の子守唄』としてインドで上演して好評を博した。

研究成果の概要（英文）：
By a study to analyse the characteristics of Sanskrit plays by Bhasa, it is surely understood that his originality lies in shortness of the plays and relativism of standing position in narrative. It stimulates the imagination of the audience and actors & directors and leaves entirely a free interpretation to them. In fact, we could experience and verify its charm through the process of adaptation from Bhasa’s “*Urubhanga*” (Shattered Thighs) to “*101 Lullabies.*” As a final output we in collaboration with Mr. Sankar Venkateshwaran, a promising Indian director, have staged in India “*101 Lullabies*” as an experimental “voice performance”, and the performance gained public favour.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：インド芸術論
科研費の分科・細目：芸術学、芸術一般
キーワード：バーサ、サンスクリット演劇、*Urubhanga*

１．研究開始当初の背景

(1)　古代のサンスクリット劇作家バーサは、1909 年にガナパティ・シャーストリーによってその幻の戯曲写本 13 編が一挙に発見された。サンスクリット文学史上における「トリヴァンドラム劇の発見」である。また同時に、門外不出の形でそれらの戯曲を上演していたサンスクリット演劇クーリヤーッタムも

「劇的に」再発見されるに至った。
　伝統的に演劇というジャンルへの愛好の強いインドでは、現代でもサンスクリット演劇、たとえば、詩聖カーリダーサの古典作品の上演も数多く試みられている。そして、バーサ劇の発見以降は、インド演劇人はそれに強い関心を示し、しかも、カーリダーサ劇とは違って、現代的解釈による前衛的な上演も多く試みられている。バーサ劇の魅力とはなにか、その独創性とはなにか、に関心を持ったのがそもそもの始まりである。

(2)　そういう折、国際交流基金 JENESYS プログラムにより 2009 年度と 2010 年度に続けて、それぞれ、インド人若手演出家二人、シャンカル・ヴェーンカテースワランとジェーハン・マネークショウを招聘すことができた。それは、ゼミにおいて学生との演劇ワークショップを実施するとともに、インドに因む演劇へ挑戦し、一般公開する企画であった。絶好の機会と考え、初年度取り上げたのがバーサ戯曲であり、それが『打ち砕かれた腿』(*Urubhanga*)であった。ただし脚色も日本語台詞も Woolner&Sarup 英訳に基づいたものであった。翌年度は、『マハーバーラタ』エピソードに基づく日本語オリジナル劇『エーカラヴィヤの親指』であったが、いずれも、まつもと市民芸術館(長野県松本市)で上演し、好評を得た。

(3)　わが国においては、サンスクリット演劇はこれまで、いわば「読む」古典文学であり、その邦訳も、辻直四郎訳で代表される文語訳であり、実際の舞台での魅力を伝えるものではない。バーサ戯曲のいくつかを原典からまずは厳密に飜訳し、そのうえで脚色・脚本化してシナリオを実際に創ってみたい、そしてその勢いで、上演してみたいという誘惑に駆られた次第である。

２．研究の目的
(1)　第一の目的は、バーサ戯曲のいくつかを、文献学的に厳密に飜訳し、その特徴や特質を分析することで、バーサ戯曲のサンスクリット演劇史における革新性や創造性を見出し、なぜ現代演劇人にバーサ戯曲がアピールする理由を考察することである。

(2)　第二の目的は、バーサ戯曲の魅力を体験的に検証するために、実際に戯曲の一つを脚色・脚本化し、現代語によるシナリオを創作することである。

(3)　第三の目的は、そのシナリオに基づき、実際に演出し上演してみることである。
　上記、シナリオ化と上演に関しては、国際交流基金で以前招聘したシャンカル・ヴェーンカテーシュワランから全面的協力を得ることができた。

３．研究の方法
(1)　特徴や特質を分析するために取り上げるバーサ戯曲は、13 編中、『マハーバーラタ』のエピソードに基づく 6 編を中心とすることにした。『真ん中っ子』(*Madhyamavyayoga*)、『使者の弁』(*Dutavakya*)、『使者ガトートカチャ』(*Dutagatotkaca*)、『五夜』(*Pancaratra*)、『カルナの重荷』(*Karnabhara*)そして『打ち砕かれた腿』である。その理由は、ナラティヴの相対化(違う立場から見た別解釈)という特徴の抽出には、バーサの純然たる創作作品よりも、インド人にとり、アイデンティティともいうべき叙事詩『マハーバーラタ』に因む作品のほうが、一般的な常識的解釈の意表を突く解釈が秘められているのではないか、また、『五夜』を除いては１幕のみの短編であり、自由な解釈・演出の余地が多いのではないか、と思われるからである。

(2)　シナリオ化する戯曲の絞り込みは、実質的な演出を委嘱するシャンカルとメイルによる頻繁な意見交換で行い、お互いに、演出のアイデアも含めて提案しあう形で候補作品の絞り込みの作業を進めた。
　最終的には 2012 年 3 月のインド訪問の際に、絞られていた『カルナの重荷』と『打ち砕かれた腿』について協議し、やはりサンスクリット演劇史上「唯一の悲劇」とされる後者への再挑戦となった。

(3)　上演計画に関しては、当初の計画を大幅に変更せざるをえなかった。それは、上演劇場として最初から第一候補と考えていた、まつもと市民芸術館(長野県松本市)の支配人の異動により、芸術館の全面的な協力の約束が引き継ぎ洩れのため白紙に戻ってしまったからだ。
　そのため、シャンカルを日本へ招聘し、１ヶ月ほどの滞在期間で、集中的に複数の日本人役者（あるいは学生）と稽古をした後、上演という当初の目論見は、制作経費的に不可能になってしまった。
　次善策を模索したが、劇場使用料や諸経費を考慮すると、インドでインド人役者による上演しか選択肢はなかった。それは「日本語による」シナリオも断念することを意味した。それを補う意味では、映像記録を残し、その字幕に日本語を被せることを考えた。

４．研究成果
(1)　主として 6 編の戯曲の比較を中心とする飜訳研究の成果は、現在、『打ち砕かれた腿』の飜訳も添えた論文として公表すべく執筆中であるが、そこでは以下のような指摘な

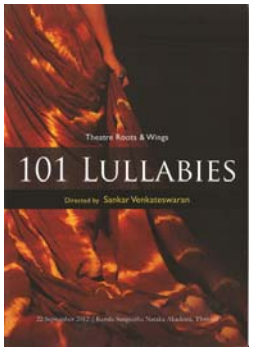
どが提示されるであろう。
　バーサ真作問題との関連では、座頭による定番化した序幕は、戯曲の文学的な技巧よりも、上演上の効果が優先されており、バーサ劇がかなり頻繁に上演された状況を推測させる。とすると、これらの戯曲写本は、そのいくつかをレパートリーにもつサンスクリット演劇クーリヤーッタムのためのバーサ原作に基づく脚色版のシナリオではないかという解釈が説得力をもつ。
　また、『打ち砕かれた腿』が、演劇論の権威的論書『ナーティヤシャーストラ』における死や戦闘場面などの禁止規定を侵犯し、『潅頂式』(*Abhisekanataka*)とともに、神クリシュナを一種のトリックスターと強調する点でナラティヴの相対化の代表作である。これが「悲劇」であるか否かは措いておくとしても、バーサの創作した登場人物息子ドゥルジャヤや、『マハーバーラタ』と異なって、母ガーンダーリーを戦場へ駆けつけさせる状況の改変によって効果的に悪玉ドゥルヨーダナを相対化する卓越したアイデア、などなど『打ち砕かれた腿』は語ることが多い戯曲であることを指摘する。

(2)　実際の上演シナリオに関しては決定に至るまでには腐心した。原作では、序幕での座頭と助手は別としても、11 名の登場人物がいるが、現実的な制作経費の制約があり、日本と比較して物価の安いインドにおいてインド人役者による上演であっても、可能な限り少ない登場人物での脚色・脚本化が求められた。日本語の台詞も断念した以上、それに替わる新鮮なアイデアも必要であった。
　研究代表者として主張した提案は、主人公はドゥルヨーダナ。イメージとしては、現代社会の敵とされたリビアのカダフィー大佐とダブる現代解釈・現代演出であった。さらに、やはり日本語台詞を捨てきれず、宮城聰演出法を採用して、主人公ドゥルヨーダナに対して、スピーカーとして日本人男優、ムーバーとしてインド人男優とする演出にこだわったが、打診した意中の日本人男優にインドでの公演ということで断られた段階で撤回した。
　シャンカルの提案は、意外なアイデアで、母ガーンダーリーだけの一人芝居とし、しかも台詞はミニマムにしてヴォイス・パフォーマンスとするというものであった。ガーンダーリーの「語る」悲劇ではなく「感じた」悲劇というものであった。しかも、このガーンダーリーは普遍的な「母」のシンボルとも解釈するという。当初のコンセプトからはかなり逸脱するものではあったが、制作費という現実的な問題は別としても、研究目的のひとつであるバーサ戯曲への解釈の自由さ、その革新性への体験的挑戦というアスペクトからは極めて新鮮であるこの提案を最終的には二人は合意した。この実験劇に関心を抱いた、演技派のインド人女優マンダーキニー・ゴースワーミからは直ぐに快諾を得た。
　次の問題は、音楽であった。音楽担当の船津恵美子は、最初から一貫してインド音楽ではなく、むしろ西洋の現代音楽を提案しており、ジョン・ケージ、あるいは、ベンジャミン・ブリテン的な主題ピースなどを準備していたが、シャンカルは、ヴォイス・パフォーマンスには、ガーンダーリーがガンダーラ出身ということもあり、ヴォイス文化圏のメロディがほしいと譲らず、ウズベキスターンの音源を提示した。現実的には唄う女優マンダーキニーと舞台脇にてキーボード演奏する船津恵美子の即興的パフォーマンスとなることもあり、二人の合意にゆだねた。最終的には、「現実的に唄わねばならない」マンダーキニーが、インド旋律と類似するウズベキスターンの旋律でないと唄う自信がないということで決着が付いた。
　脚本は、原作『打ち砕かれた腿』のコンテクストを前提としナラティヴをほとんど排除した、サンスクリット演劇史上おそらく初めてのヴォイス・パフォーマンスとなった。すなわち、ほとんど台詞のない、非言語的なパフォーマンスによる、盲目の夫に準じて目隠しをしたガーンダーリーの悲しみと呪いと救済の感情表現のみとした。
　ウズベキスターンの子守唄を主題とした旋律を背景に、100 人の息子を戦場で亡くした母と、自らの「母なるもの」への子守唄、という意味を込めて、『百と一の子守唄』というタイトルの脚本を研究代表者とシャンカルとで共同創作した。

(3)　インド公演となると大学の夏期休暇の時期しか不可能なので、稽古期間は多少不足を承知のうえで、公演日は 2012 年 9 月 22 日とし、ケーララ州トリシュール市にある州立サンギート・ナータック・アカデミーにて、入場料無料・一般公演という形で、『百と一の子守唄』(”*101 Lullabies*”)を上演した。
　演劇評論家レーヌ・ラーマナートゥをはじめ、観客約 150 名からはきわめて好意的な評価を得た。「台詞がほとんどなくても、呻きと唄とメロディだけで、この戯曲のもつ悲劇の感情体験ができた」というスタッフ一同が最も期待していたコメントも聞くことが出来た。
　この公演の録画記録をテレビ信州の協力のもと、現在編集中で、日本語の字幕スーパーも制作中である。

　以下の図版は公演プログラムである。順番に、①表紙、　②制作者のことば(“*Bhasa, why? Accidental or destined?*”)、③演出

家のことば(*“Director’s note”*)、④キャスト＆スタッフ（*“Cast & Credits”*）（「科研基盤研究(C)の成果の一部」明記）



５．主な発表論文等

〔その他〕
ホームページ等
シャンカル・ヴェーンカテーシュワランの主宰する Theatre Roots & Wings 公式サイト
http://theatreraw.jimdo.com

公演ポスター（出演者などの情報含む）
http://theatreraw.jimdo.com/news-events

公演フォト
http://theatreraw.jimdo.com/productions

６．研究組織
(1)研究代表者
船津　和幸（FUNATSU KAZUYUKI）
信州大学・人文学部・教授
研究者番号：40219085

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者
シャンカル・ヴェーンカテーシュワラン（SANKAR　VENKATESWARAN）
Theatre Roots & Wings 主宰
研究者番号：なし

船津　恵美子（FUNATSU　EMIKO）
信州大学・人文学部・非常勤講師
研究番号：なし